

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 豊田武先生追悼

著者	村上 直, 北島 正元, 清水 久夫
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	33
ページ	78-82
発行年	1981-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10276">http://hdl.handle.net/10114/10276</a>

# 豊田 武先生追悼

法政大学史学会会長・文学部教授豊田武先生は、昭和五十五年三月二十九日、都内目黒区の東京共済病院で心筋梗塞のため逝去された。享年七十才。一同にとって全く突然の訃報であった。

葬儀（児玉幸多委員長）は四月十二日、新宿区南元町の千日谷会堂で神式により営まれ、法政大学文学部長矢内原伊作教授および在学生総代柏美恵子さん（大学院日本史学専攻）が弔詞をのべ、ほか関係者多数が会葬した。墓地は青山霊園（一種口第十六区三十三圃七番）。なお三月二十九日付で従三位勲三等（旭日中綬章）に叙せられた。

先生の略年譜・著書論文目録は、本誌前号「豊田先生を送る」に載せてあるが、若干の追補を追悼文三篇のあとに掲げた。

\* \* \*

## 豊田武先生の御逝去を悲しむ

村 上 直

法政大学教授豊田武先生は、昭和五十五年三月二十九日、午後一時半、悲しいことであるが、心筋こうそくのため急逝された。正確にいえば定年退任の日の二日前であり、現職のまま亡くなら

れたのである。

豊田先生は、三月九日に古稀を迎えられている。古稀といえ、かつては杜甫の言葉のように「人生七十古来稀なり」と、長寿の年齢に数えられていたが、現在では、七十歳をすぎても学界の第一線で活躍されている先生方もかなり多くなってきた。とくに豊田先生の身近で接していた私たちは、一度も先生にたいして老境に入った学者という感じをいだいたことはなかった。かえって研究や教育にひたすら情熱を傾けられていたお姿が、今も臉に強くやきついている。それだけに訃報に接した当時は、二日前、お元気な先生と歓談した後だけに、どうしてもそのまま事実として信じることができなかったのである。

豊田武先生は、明治四十三年に東京府赤坂区青山にお生れになり、奈良女子高等師範附属小学校に入学され、東京府立第一中学校（現、都立日比谷高校）、旧制浦和高等学校を経て、昭和四年四月、東京大学文学部国史学科に入学、同七年三月に卒業後一時、大学院に籍をおかれたが、やがて文部省宗務局の嘱託となり、宗教制度の調査に励まれる傍ら、卒業論文の「室町時代の商業」をさらに深められたのである。また、御尊父の八十代氏は国文学者として東京府青山師範学校教諭、さらに奈良女子高等師範学校、駒沢大学の教授を歴任され、叔父君には東京大学名誉教授

で文化勲章を受賞された辻善之助博士がおられ、学者として恵まれた環境のなかで成長なされたのである。

先生は昭和十四年、二十九歳で東京女子高等師範学校（現、お茶の水女子大学）助教授となられ（昭和十六年に教授）、昭和二十年の終戦直後には、一時、文部省図書監修官に移られ、占領軍の管理下という不自由な時代に「国のあゆみ」の編纂など日本歴史の教科書の作成に携さわれて、混沌の歴史教育に新たな光明をともされたのである。そして同二十二年から東北大学教授に任ぜられ、以後、二十五年の長きにわたって研究と教育のためにご尽力なされ、多くの門弟を育成されたのである。昭和四十八年三月、定年退官後は、法政大学文学部史学科の主任教授として、引続き後進のご指導に当られ、七年間にわたって史学科の内容充実に力を尽くされた。また、こうした専任教授の他、一橋大学教授（併任）も勤められ、日本大学をはじめ東京大学・上智大学・国学院大学にも非常勤講師としてご出講になり、研究者の育成にも努められたのである。

二月九日には、『法政史学』三二号に掲載されているように、法政大学の専任教授としての最終講義で「一歴史家の歩み」と題して、みずから約半世紀に及んだご研究の経過と分野についてまとめられ、将来への抱負を語られ、多くの聴講者に深い感銘を与えられたのである。

先生のご研究がきわめて幅の広いことは、学界でも定評があるが、とくに中世から近世、さらに歴史文学や小説の分野にまで強い関心を示されていたことから、常に歴史を総合的に広い視野か

ら考察していこうとされた、研究者としての姿勢をうかがうことができるのである。

先生のご専門の研究は、何といってもまず第一に卒業論文を深化させ、市場・問屋・為替などの問題を体系化され、のちに学位論文にまとめられた『中世日本商業史の研究』をあげることができ。次に注目されるのは、昭和九年以来、ご発表になった一連の座の研究の成果である。先生は、これにはかなりの意欲を燃やされており、能楽の座などを含めて将来は是非とも大成したいといつも話されていた。また、こうした商業史の研究は当然、都市の研究にも結びついていくが、堺をはじめ近世の城下町にも強い関心を示され、『日本の封建都市』を上梓された後、最近では地方都市の研究も進められ、都市の中心的研究課題ともいふべき配給や輸出の機能の解明にも努められている。

他に先生が力を入れた分野に中世武士団の研究がある。とくに家の相続形態の特質から追求し、物領制の展開を基軸に研究を進められた『武士団と村落』は著名な研究書であるが、それに関連して名（苗字）の分布を調査された『苗字の歴史』や『家系』なども刊行され、研究は多方面におよんでいる。その他、日本宗教制度の基本的文献である『日本宗教制度史の研究』また、『英雄と伝説』などのユニークな著書もある。

先生の著書、編著、校訂・監修本および研究論文はきわめて多い。しかし、これを大きくみると、商業・座及び都市関係、神社・寺院関係、武士団関係、それに社会・文化関係に分けることができる。いずれの分野もすぐれた創見に満ち、常に新鮮な問題提

起を行ない、学界をリードされてきた。また、先生の著書のなかには『日本歴史概説』のような通史も多く、高校や中学校の日本史の教科書の編修や文部省の学習指導要領の改訂にも参画されるなど、歴史教育にも強い関心を示されていたのである。

さらに先生はアメリカの日本史研究者との交流を深め、積極的研究を援助されている。昭和三十四年には渡米されて、スタンフォード大学客員教授としてサー・ジョージ・サンソム教授の『日本史』の執筆を助け、昭和四十七年にはアメリカ・イェール大学で開催の日本中世史ゼミナールの指導のため渡米さ、研究を通してジョン・ホール教授と親交を結ばれている。なお、この日米合同の研究成果の一部は『室町時代——その社会と文化』と題して上梓されているのである。

昭和五十五年五月三日、先生の学恩に浴した多くの子弟や知友一同が、ご夫妻を神田の学士会館にお迎えして盛大な古稀記念祝賀会を催すことに決定していた。先生もその日を心から楽しみにされていたが、その実現を見ずして急逝なされたのである。本当に残念でならない。先生の最後のご著書は遺著となってしまうれた『日本の封建制社会』であるが、研究と学問一筋に歩まれた先生の生涯の記録は、知人・門弟の思い出や弔詞とともに『故豊田武先生追悼集・一歴史家の歩み』に収められている。

いま先生は東京青山墓地で静かに永遠の眠りにつかれています。ここに、先生の数多いご業績にたいし深く敬意を表するのととも、心からご冥福をお祈りするしだいである。

## 豊田武教授を追悼する

北 島 正 元

豊田さんが本年三月に急逝されてから、早くも八カ月が過ぎた。「去る者は日に疎し」のたとえに反して、豊田さんの思い出はかえって鮮明を加えるばかりである。故人の人徳というものであろう。専攻を同じくする大学の後輩として有形・無形の恩恵をうけたことは多大なものがあつた。自宅も学芸大学と上野毛の近接した距離にあつたので、家内ともども時々お邪魔して御指導を頂いた。豊田さんが目黒区内に住んでおられた関係で、私の勤務する都立大学が、目黒区から歴史の編さんを依頼された時も、いち早く豊田さんの御指導をお願いしたところ、快く相談に乗って頂き、区内最多の史料を所蔵する碑文谷の角田家などを紹介して下さった。地もとの区史ということもあったが、豊田さんの地方史についての関心の深さを語るもので、東北地方の自治体史の編さんに精力的に取組んで、すぐれた成果をあげられている。豊田さんの専攻はいうまでもなく、中世の商業史・都市史であるが、近世史の業績にも目を通し、研究者もよく知っておられたことに敬服したものである。昭和三十年頃に近世村落自治史料研究会のメンバーの一人として、土佐に調査に出かけられた時にお供したが、中世末城下町の構造を伝える史料の宝庫ともいうべき『長宗我部地檢帖』三六八冊に接して、すっかり興奮した。今は故人と

なられた地もとのすぐれた研究者松本豊寿氏の説明をきき、それに適切な助言を熱っぽくくり返された豊田さんの面影が忘れ難い。その重厚な学風の蔭にたぎる学問的情熱をまざまざと見せつけられた思いであった。歴史地理学者である松本さんもこれからという時に亡くなられて惜しいことであるが、さらに今又豊田さんを失ったのは感慨無量である。

豊田さんの研究の核となるものは、中世の商業史・都市史であり、『中世日本商業史の研究』（昭和二十七年増訂）と『日本の封建都市』（岩波書店）が主著に擬せられるのがふつうであるが、文部省宗教局勤務時代の所産である『日本宗教制度史の研究』も、少壮二十八才の実証的研究の成果として高く評価される。実証的研究といえば、『中世日本商業史の研究』も、史料を通して問題意識を体系化するという著者の方法が結晶したものであり、中世商業史を研究しようとする人は、かならず参照すべき古典的名著である。『日本の封建都市』は、著者から書評を頼まれ、二回読んで執筆した記憶があるが、内容ははっきりしない。ただ中近世の都市研究が本書を踏台に大きな躍進をとげるだろうと痛感した覚えがある。豊田さんの本領が、封建都市とその機能である商業史であることはもちろんであるが、その場合、日本だけに視野を限定せず、西ヨーロッパの封建都市と比較検討するという方法をとり、織豊政権と堺などの貿易都市の豪商との結びつきを洗い、そこから織豊政権の世界史的位置づけ——封建王政と規定された。そのユニークな成果に強く引かれたことを忘れることができない。幕藩制領主論が、最近学界に復活しつつあるが、豊田さ

んの提起した世界史的視点がまず研究史整理の発端で行われるべきだろうと思う。

今からもう十年も前のことだが、お宅に伺った時、浮かぬ顔で「医者から糖尿といわれてね、食事制限を受けることになった」といわれ、何気なく「奥様も大変ですね」と返事したが、甘い物がとりわけ好きな豊田さんのことゆえ、その心中は察するに余りがあった。またその後の話に、「糖尿は十年もてば大丈夫だそうだね」といわれたことがある。その十年の苦闘の終わりがら元氣になられ、毎朝近くの碑文谷池の周囲を隣組の人たちの先頭に立って走るほどの回復ぶりであったのが、弓の弦の切れたように突然世をへだてられた。安らかな御臨終であったときが、それは、三十年以上も、研究一すじに精進し、独自の金字塔をきずかれた達人の最後にふさわしいものであった。

## 豊田武先生を偲んで

清水 久夫

豊田武先生にはじめてお会いしたのは、先生が東北大学教授であった最後の年に、法政大学へ兼任講師としてこられたときであった。昭和四七年（一九七二）五月の初旬、新学年がはじまって間もないことで、私は学部四年生であったが、ひどく緊張して先生の授業に出席したのを覚えている。

豊田先生が法政大学へ来られることを知ったのは、そのほんの少し前のことで、お名前だけはよく存じあげてはいたが、まさか、自分がその高名な先生の教えをうけることができようとは、全く考えておらず、多少の不安もあったが、大きな期待をもって最初の授業を待ち望んでいたものであった。

しかし、先生は、寝不足気味で、しかも、たいへん疲れているような御様子であった。授業の終わりに、先生は、アメリカから帰ってきたばかりで、「時差ボケ」がまだなおらず、ひどく眠い、と打ち明けられた。また、東京と仙台との往復で、かなり疲労もしておられたのであろう。若くはない先生にとって、たいへんつらかったに違いない。先生は、その後も、このような無理なことをしばしばされていた。それはまさに、「全力投球」そのものであった。

豊田先生は、年に数度、大学院の学生を連れて、主として関西方面を旅行された。その多くは、かなりの強行軍で、そのおかげで、数々の貴重なものを見ることはできたが、——今となつては、それもむずかしくなつてしまつた——、宿へ戻ると、疲労を覚えた。そのようなときにも、先生は宿でゆっくりとくつろぐということをほとんどなさらず、夕食後は、たいてい「勉強会」となつた。このような先生に、はじめ私たちも驚いたものである。しかし、この先生との旅行によって、私たちも見聞をひろめることができた。また、それは先生のお望みのようでもあった。

先生は、学生との接触を非常に大事にされた。先生が兼任講師として来られているときから、学生を自宅によび、卒論指導をさ

れていた。主任教授となられてからは、学生の合宿には必ず参加され、また、酒をたしめないにもかかわらず、コンパにはいつも来てくださった。なくなられた晩も、先生は神楽坂での会合に出席してくださるはずであった。先生は、いつも、学生のために、御自身の大切な研究のための時間を割いてくださったのである。

先生は、授業のとき、御自分のなさっている御研究のことをよく話された。どこそこにある史料にこういうのがあった、あるいは、だれそれはこういうが、そうではなからう、等々、それらは実に多方面にわたっていた。これは私たちに、大いに刺激を与えられたのである。

授業で話されたことは、しばらくすると、論文となつて発表された。先生の最後の著書となつてしまつた『日本の封建制社会』も、その多くは授業で述べられたことである。

豊田先生は、『座の研究』の刊行を心がけられ、いつも私たちにそれを話されていた。これも、永遠に未完成のものとなつてしまつた。今となつては、たいへんくやまれることである。

ここに親身になつて御指導くださったことを深く感謝するとともに、心から先生の御冥福をお祈り申し上げるしだいである。

#### 故豊田武教授著編書目録補遺

- |            |      |       |     |
|------------|------|-------|-----|
| 『日本の封建制社会』 | (遺著) | 吉川弘文館 | 昭55 |
| 『歴史教育学事典』  | (共編) | ぎょうせい | 昭55 |
| 『日本海地域研究一』 | (共編) | 文献出版  | 昭55 |



故 豊 田 教 授 遺 影